

徐訐『鬼恋』試論——悲恋への序奏

杉 村 安幾子

1. 序

文学史には常に、一種非常に不可思議な現象がある。広範な読者を得た多くの作家が、評論家には認められないのである。評論家がものした文学史は無情にもそうした作家達を放逐し、彼らは寂しくひっそりと何十年も落ちぶれざるを得ない¹。

これは 1940 年代中国のベストセラー作家徐訐（じょくXu Xu、1908-1980）を紹介した文である。徐訐は次のようにも言及されている。

1940 年代の抗日戦争後期、中国文壇で一時は飛ぶ鳥を落とす勢いでありながら、その後完全に活動の消息の絶たれてしまった作家が数人いる。彼らの名を挙げてみよう。銭鍾書・徐訐・張愛玲・無名氏だ²。

文学作品の良し悪しは必ずしも読者の多寡で測られるものではない。人気のあるベストセラーが良い作品であるという訳でも、限られたごく少数の読者しかいない作品だから質が悪いという訳でもない。読者数の多さが明確に示していると言い得るのは、精々の所、ある時代の流行や宣伝効果ぐらいではないだろうか。

しかしながら、上記の引用に挙げられた四人のうち銭鍾書（Qian Zhongshu、1910-1998）・張愛玲（Zhang Ailing、1920-1995）は、彼らが作品を発表して知名度を上げた時代から 70 年以上経つ今日においても、読者から高い支持を得ているだけでなく、研究専門書や論文が陸続と世に出続けており、今後刊行

される文学史から彼らの名が「放逐」されることはあり得ないだろう。現在、彼ら二人を追うかのように、無名氏（Wumingshi、1917-2002）と徐訏の研究も進みつつある。

中国現代文学史とは厄介な存在である。元々、中国文学の中には「雅」と「俗」の概念が厳然たるヒエラルキーとして存在しており、平易な作品や多くの人に受け入れられる作品を軽んじる傾向が定着していた。そもそも「小説」という語自体が、思想家や歴史家の書く「大道（正しい道）」としての文章に対応するものであり、小説は「高級」な文人や学者の余技に過ぎなかったことを受ければ、そうした上下概念のある学術的な価値判断の背景を推測することはたやすいだろう³。加えて、文学が政治に翻弄される存在であることは、どの国でも多かれ少なかれ見られる現象だが、とりわけ近現代中国においては政治的な観点のみから文学作品の良し悪しが語られ、政治的に正しくない作品は悪しき存在と見なされるか、或いはそれこそ文学史から「放逐」されるしかなかったのである。その点から言えば、徐訏は後に香港に渡り旗幟鮮明な「反共」小説も著しているため、中国大陸の文学史から「放逐」されたのは却って無事であったことの証左であるとも見なせるだろう。文学者の政治的な立場は、文字通り彼らの生存に直結していたからである。

本稿では彼の出世作である『鬼恋』を取り上げ、中国伝統の「人鬼恋故事」との関わりから考察してみたい。又、徐訏が何故その後「寂しくひっそりと何十年も落ちぶれ」、「完全に音沙汰がなくなって」しまったのかにも論及する。

2. 徐訏について

日本では専論が3点しかない徐訏について、まずはある程度詳しい紹介をしておこう⁴。

2. 1. 経歴

徐訏は光緒 34（1908）年 11 月 11 日、浙江省慈溪の伝統的な読書人の家に

生まれた。本名は徐伯訃。父は光緒 30（1904）年の挙人であり、後に上海の銀行家となる徐荷君、母は姜葉如。徐訃は三人続いた娘の後によく生まれた、徐家期待の男児であった。言葉を覚える頃になるとすぐに家庭教師がつけられ、当時の読書人の家庭における教育としては普遍的であった、科挙受験に向けた四書五経の学習を始めている。

5 歳で寄宿舎に入寮して小学校へ通学。これは父親の判断によるものであったが、幼くして親元を離れたことは、徐訃の性格形成に大きな負の影響を与えたと言われている。1921 年、寧波の中学校に入学したが、同年のうちに北京の成達中学に入学し直し、更に上海のカトリック系の聖方済中学（St. Francis' School）に転校したが、修道士の偽善に不満を持ち、わずか一学期を過ごし、すぐ又成達中学に戻っている。

1925 年に成達中学を卒業、同じく北京の潮南第三連合中学の高校部に入学、『紅樓夢』や『西廂記』などを読んで過ごした。1927 年、高校を卒業後、北京大学哲学系に入学。当時の北京大学哲学系では、胡適（Hu Shi, 1891-1962）・陳寅恪（Chen Yinge, 1890-1969）・金岳霖（Jin Yuelin, 1895-1984）ら錚々たる教授陣が授業を担当していたが、徐訃には飽き足らなかったようである。特に胡適の授業については「聴講の学生が教室に満ちていたばかりか、窓の外にも立って聴く人が溢れていた」が、「講演みたいで、内容は通俗的、哲学系の授業ではないようだと感じた」⁵と回想している。またこの時期、徐訃はマルクス主義思潮の影響を受けた。

1931 年に北京大学を卒業するも、同大で助教を務めながら心理学系で継続して学んだ。心理学系教授の汪敬熙（Wang Jingxi, 1898-1968）の授業を好み、欠席をせずに受講している。尤も徐訃の回想には「私は一年半ほど勉強したら、その後は勉強を止めてしまった。何故なら、汪敬熙先生の授業以外、取るべき授業などなかったからだ」⁶とある。ほぼ時期を同じくして創作を開始し、1930 年 6 月に戯曲『青春』を発表⁷。小説創作としては 1933 年 8 月『東方雑誌』第 30 卷第 16 号に掲載された「小刺兒們〔シャオラーアル達〕」が処女作となった。林語堂（Ling Yutang, 1895-1976）主編の『論語』半月刊に投稿したり、又林語堂の創刊した『人間世』月刊の編集を務めたりもしている。

雑誌編集に携わる中で魯迅（Lu Xun、1881-1936）との交流もあったが、魯迅は徐訏を林語堂の弟子や配下のように見ていた⁸。

1935年に趙璉と当時としてはまだ珍しかった恋愛結婚をし、1936年秋に渡仏。パリ大学（ソルボンヌ）に留学している。この留学中に社会主義・共産主義に懐疑を抱き始めた。1937年1月、『宇宙風』第32期・33期に中編小説「鬼恋〔幽鬼の恋〕」を発表し、一躍上海文壇で名を挙げた。徐訏は1937年7月の盧溝橋事件に端を発する中日戦争の勃発を受け、翌年フランスから帰国。その後、『阿剌伯海的女神〔アラビア海的女神〕』（1937）、『吉布賽的誘惑〔ジプシーの誘惑〕』（1940）、『荒謬的英法海峡〔でたらめなイギリス海峡〕』（1941）等、続々と小説を世に問い、人気作家となっていき、出世作の「鬼恋」のタイトルにかけて「鬼才」とまで称された。抗戦期には『読物』月刊や『人間世』半月刊を立ち上げ、太平洋戦争勃発後には重慶で『作風』を主編、国立中央大学師範学院国文系で教授も兼任した。1941年には趙璉と協議離婚⁹。

徐訏の名を更に高からしめたのは、1943年3月から重慶の『掃蕩報』副刊で連載を開始した長編小説「風蕭蕭」であった。翌44年には成都東方書店が単行本化、2年のうちに五版を重ねた。この爆発的人气によって、1943年は現代中国文学史上、「徐訏年」と呼ばれている。

1944年、『掃蕩報』の駐米特派員として渡米、ニューヨークとウィスコンシンに滞在。抗戦勝利後に帰国。1949年に葛福熾と再婚したが、翌1950年に家族を置いて一人香港へ。元々は後から家族を呼び寄せる手筈であったが、当時の政治的形勢は香港と大陸を二分したため、自由な行き来はおろか書信すら送ることが出来ないまま二人は離婚をせざるを得なくなる。1954年に徐訏は張選倩と再々婚。香港では珠海書院（Chu Hai College of Higher Education）中文系講師、シンガポールの南洋大学教授、香港浸会学院（Hong Kong Baptist University）中文系主任・文学院院长などを歴任。この時期の創作としては長編小説『江湖行』（四巻本として1956～1961）、『時与光〔時と光〕』（1966）、『悲慘的世紀〔悲慘な世紀〕』（1977）が挙げられる。

1980年7月にパリで開催された中国抗戦文学会議に出席。8月に香港に戻った後、律敦治肺病療養院に入院。10月5日、肺癌のため逝去した。享年72

歳。死の直前である9月20日、洗礼を受けカトリックに入信している¹⁰。

2. 2. 作風と先行研究

徐訏の創作人生は長く、詩や散文、戯曲も発表している。司馬長風が「徐訏は多産な作家でもあり、またオールマイティーな作家でもあった」¹¹と述べる通りであるが、創作の中心は小説であったと言って良い。現時点で最も網羅的な徐訏の作品集である『徐訏文集』(上海三聯書店2008年)全16巻は、第1巻から第8巻が小説、第9巻から第12巻が散文、第13巻から第15巻が詩歌、第16巻が戯曲をそれぞれ収録している。

徐訏の小説創作活動については、明確な線引きは難しいが、徐訏自身の所在地とその時期及び創作の特徴から、大きく三期に分けることが出来る。初期の小説は『鬼恋』、『阿剌伯海的女神』、『吉布賽の誘惑』、『荒謬的英法海峡』、『精神病患者の悲歌〔精神病患者エレジー〕』(1941)など、主に上海や四川省成都で刊行された中編小説群である。これらの作品は、ヨーロッパを舞台にしていたり、西欧人を登場させたりといったエキゾチシズムと幻想趣味に大きな特徴がある悲劇的結末の恋愛小説が主である。徐訏はこうした特徴で当時の読者の心をつかみ、スター作家にのし上がっていったとも言い得るだろう。この頃の徐訏は「後期浪漫派」と分類されている¹²。

中期は中華人民共和国建国以後、徐訏が香港に渡ってからの短編小説群。『婚事』(1950)、『痴心井〔熱情の井戸〕』(1952)、『盲恋』(1954)など短編小説集としてまとめられている。作品の傾向としては、悲劇的恋愛を描くという前期の特徴を引き継いでおり、中でも『盲恋』は谷崎潤一郎『春琴抄』(1933)やトマス・ハーディ『グリーブ家のバアバラの話』(*Barbara of the House of Grebe*, 1890)とのモチーフ上の類似点があり、総じてこの時期の作品群は些か特殊な恋愛を描いたドラマチックな展開のものが多い。

後期も香港での創作が中心であり、中編『巫蘭の悪夢〔巫蘭の悪夢〕』(1977)もあるが、『江湖行』、『時与光』、『悲惨的世紀』など長編が多い。『江湖行』は徐訏自身も気に入っている最大の長編である。農村出身の少年野壮子が、上海での大学進学、内地での従軍生活などを経、様々な人生経験を積み中で

多くの女性とも恋愛する様が描かれている。また、『悲慘的世紀』は紀元前 2050 年の別の惑星での出来事としながらも、1950 年代から 60 年代の中国大陆における政治キャンペーンを背景としていることが明らかな反共小説であり、徹底した中国共産党批判の姿勢が明示されているという点において、それまでの徐訏の作品とは作風が大きく異なっている。

台湾では徐訏の生前から『徐訏全集』全 18 集の刊行が進んでいたが、現時点でも第 15 集以降は未刊である。香港では香港当代作家作品選集として『徐訏卷』（云丘編、天地図書 2015 年）が編まれた。一方、前述の『徐訏文集』全 16 巻は中国大陆で 2008 年に上海三聯書店から刊行されている。徐訏に関する評伝は現時点では呉義勤・王素霞著『我心彷徨——徐訏伝』（上海三聯書店 2008 年）一点のみだが、娘の葛原による『残月孤星——我和我的父親徐訏』（上海文化出版社 2003 年）は家族の視点から徐訏が描かれている。また、作家作品論には呉義勤著『漂泊的都市之魂——徐訏論』（蘇州大学出版社 1993）がある。

3. 『鬼恋』について

3. 1. 作品梗概

『鬼恋』のあらすじを見てみよう。テキストは夜窗書屋発行の中華民国 36 (1947) 年 19 版に拠る。

ある冬の晩、「私」は上海の煙草屋で全身黒づくめの美しい女に出逢う。その後、その黒づくめの美女が南京路で「人よ」と呼びかけて道を尋ねて来たため、「私」は興味を持って道案内をしつつ言葉を交わす。彼女は自らを人間ではなく、幽鬼であると述べ¹³、「私」を驚かす。「私」は彼女の言葉を信じられずにいるが、一方で彼女の美しさには魅入られ、再会を約束する。

その後、二人は頻繁に逢うようになり、「私」は博識な彼女にどんどん惹かれていく。尤も、二人が逢うのは必ず夜であり、そぞろ歩きながら話すか、天候の悪い時にはカフェであった。彼女はどんなに誘っても「私」の家には来ようとはしなかった。そして彼女の態度は、優しさはありつつも、いつも

どこか冷淡でよそよそしかった。

ある夏の晩、二人で逢っている際に雨が降り出し、雨を避けるために二人は郊外にある彼女の家へ行く。濡れた服を着替えるようにと、彼女は男性ものの服を「私」に手渡した。夫の服だと聞き、「私」は大きなショックを受ける。「私」は詳しいことを聞き出そうとするが、彼女は語ろうとしない。思わず愛を告白した「私」に、彼女はあなたは人間で、自分は幽鬼なのだから、異なる世界の住人は恋愛出来ないのだと拒絶する。彼女は、自分達はあくまで友人関係なのだと言ひ、夜明けに「私」は悄然とその家を去る。

諦めきれない「私」は日が高くなるのを待ち、再度その家を訪れる。しかし、一人の老婆が出て来て、この家には誰も住んでいないと告げて門を閉めてしまった。その晩、「私」が三度その家を訪ねると、迎えたのは彼女であり、私達は今後はずっと友人であると告げる。

翌日、「私」は又も日中に彼女の家を訪れる。出て来た老人にここの主人である女性の友人だと告げるが、老人はかつて自分の娘が住んでいたが、彼女は二三年前に亡くなり、今は空き部屋であると語る。「私」は彼女の部屋に入ったことがあると粘り、無理に部屋に上げてもらうが、部屋の中は訪ねた時のままでありながら、長いこと人が住んでいない様子であった。

二人はその後も夜に逢い続け、一年が過ぎた。「私」は彼女に愛を告白し続け、彼女は拒絶し続けた。その間、友人や親戚達は「私」が痩せたと声を揃えた。病気で寝込んだ「私」は、彼女と結婚できないのなら、彼女を忘れるしかないと言ひ、決意する。一か月ほど彼女に逢わずに過ごしていたが、ある日「私」は酔った勢いで彼女の家を訪ねてしまい、彼女につらい時には友情を忘れずに又訪ねて来るようにと言われ、彼女を忘れると誓った決心は消えてしまう。ある晩、「私」は彼女の家で酔って寝込んでしまうが、眼が覚めた時には自分の家にいた。使用人はスーツ姿の青年が送って来たのだと説明し、「私」に彼女からの手紙を渡す。その手紙には、自分は旅に出ること、旅先や期間は未定であること、あなたにも旅行を勧める、いつか又純粋に友人として会うことを期待する、とあった。「私」は彼女の忠告に従い旅に出るが、その間も彼女のことを忘れられずにいた。

二か月後、上海に戻って来た「私」は一人の尼僧を見かける。その尼僧こそ彼女であった。「私」は彼女を追い、今度こそ本当に幽鬼などではなく、人間だと認めるべきだと詰め寄る。彼女は泣き出し、次のように語る。自分は人間になどなりたくないのだ。これまで秘密裡の革命工作に従事し、18回もの暗殺に関与した。そのうち13回は成功、5回は失敗であり、入獄と逃亡経験もある。曾て愛した人は逮捕・殺害され、曾ての仲間も友を売る者、密告する者、官僚になる者など様々で、自分一人が残されてしまった。悲哀と孤独が自分を幽鬼にしたのである。この家は夫の親の家である。それを聞いた「私」は彼女の経歴と実際は感情豊かな女性であることを知り、愛情が一層燃え上がり、帰宅後、彼女との将来を夢見る。

しかし、彼女の家を訪れた「私」に使用人が手紙を渡す。「自分は遠くへ行き、やはり幽鬼として過ごすことにする」。「私」はショックのあまり重い病気になる入院してしまう。長い入院生活の中、「私」は頻繁に花やお菓子を送って来てくれているのが彼女らしいと知る。彼女は「私」が回復してくると、「あなたの病気も良くなってきたので、旅に出ることにする」と手紙で知らせて寄越した。

退院後、「私」はたびたび彼女の家を訪ねるが、彼女は戻っていない。ある日、彼女の家に行くと、住人が換わっていた。「私」は新しい住人に頼み込み、かつての彼女の部屋に下宿させてもらう。それでも悲しみは癒えず、一年後に町に戻った。

3. 2. 『宇宙風』半月刊について

『鬼恋』は1938年に上海の夜窗書屋から、次いで翌1939年に同じく上海の西風出版社から『鬼恋』として単行本が刊行されているが、連載媒体は雑誌『宇宙風』である。

『宇宙風』についても大枠を確認しておく必要があるだろう。『宇宙風』は1935年9月16日に上海で宇宙風社により創刊された文学雑誌である。第50期までは半月刊（月に2回発行）、第51期から第66期までは旬刊（10日ごとに発行）として発行され、更に第67期からは再び半月刊に戻すという些か

不規則な発行でありながらも 1947 年 8 月 10 日の第 152 期まで発行し終刊した。主編は林語堂、その他陶亢徳、林憾廬、繆崇群、葉広良、林翊重が前後して編集作業に携わった。

上海で創立した宇宙風社、即ち『宇宙風』編集部は、抗日戦争の影響を受けて何度も拠点を替えている。1938 年 5 月には上海から広州へ、1939 年 5 月には香港へ移り、またほぼ同時期に桂林に支社を置いた。第 78 期から第 105 期は香港で組み版が行なわれ、桂林で印刷・発行がされている。1944 年 8 月には編集部が完全に桂林へ移り、1945 年 6 月に重慶へ、1946 年 2 月に再び広州へ戻って終刊を迎えた。

主編の林語堂が創刊号で「人生について心置きなく語ることを旨とする」と述べているように、『宇宙風』は当時の左翼文芸界とは一線を画す姿勢を示している。散文を主として、小説・詩歌・戯曲・書評が掲載され、中でも老舎 (Lao She、1899-1966) 『駱駝祥子』(1950 年刊。邦訳は『^{らくだのシヤンツ}駱駝祥子』立間祥介訳、岩波文庫 1980 年)、郭沫若 (Guo Moruo、1892-1978) 『北伐途次』(1937 年刊。邦訳は『北伐の途上で他・郭沫若自伝 4』小野忍・丸山昇訳、平凡社東洋文庫 1971 年)、謝冰瑩 (Xie Bingying、1906-2000) 『一個女兵的自伝』(1936 年刊) は当時において少なからぬ影響力があった作品である。これらの作品の掲載媒体であったという点だけとて、『宇宙風』は現代中国文学史上外すことのできない存在であると言える¹⁴。

徐訏が『宇宙風』に発表した作品を以下に見てみよう。

1935 年 11 月 1 日出版 第 4 期 「住的問題 [住むという問題]」

1936 年 1 月 1 日出版 第 8 期 “The Art of Play Production [演劇創作の芸術]”

1936 年 11 月 16 日 第 29 期 「外国人与狗 [外国人と犬]」

1937 年 1 月 1 日出版 第 32 期 「鬼恋」

1937 年 1 月 16 日出版 第 33 期 「鬼恋」

1937 年 3 月 16 日出版 第 37 期 「印度的鼻葉与巴黎的小脚 [インドの小鼻とパリの纏足]」

1937 年 4 月 1 日出版 第 38 期 「印度的鼻葉与巴黎的小脚 [同前]」

1937年6月16日出版 第43期 「談中西文化〔中国と西洋の文化について語る〕」

1937年7月1日出版 第44期 「談中西文化〔同前〕」

1939年6月16日出版 第80期 「男女」

このうち小説は「鬼恋」だけで、後の作品は散文である。

また、「鬼恋」が掲載された第32期は、豊子愷の絵「願わくは士大夫の此の味を知り、願わくは天下の人民の此の色の無からんことを」を表紙とし、老舎「駱駝祥子（八）」、郭沫若「北伐途次（二七）（二八）」の連載の他、林語堂が魯迅追悼文を発表しており、廢名、葉聖陶、施蟄存、周作人、沈從文らも寄稿している。第33期は豊子愷の絵「明明として月の如し、何れの時にか綴す可し」の絵を表紙とし、老舎と郭沫若の連載以外には周作人、蘇雪林、郁達夫、施蟄存が寄稿している。

3. 3. 同時代評と映画化

作家蘇雪林（Su Xuelin、1897-1999）は「抗戦期間、『鬼恋』は大後方や上海で大流行した」と述べている¹⁵。その『鬼恋』に関する比較的早い書評として、1944年の程帆「鬼恋与人恋——關於徐訏著『鬼恋』的題材与主題」が挙げられるだろう。程帆は『鬼恋』を「（徐訏の）最も広範に流行し、彼の代表作とも言い得る」と紹介した上で、物語全体を「あり得ないほど荒唐無稽」と評し、その理由を二点説明する。一点は幽鬼を自称する女がこの世を見切り、人生を棄てたと語り、厭世的な割には毎晩散歩に出ているのは非常に健康的であって、人物造型としてアンバランスであるということ。もう一点は彼女が「私」と楽しく語り、且つ又親しく付き合っているのに、求愛する「私」を振り切って旅に出る理由が理解できないというものである。この指摘自体は見当違いとは言えないが、最終的には「誘惑に満ちた描写」で「淡い水彩画のような」徐訏の作品は、「砂糖衣で醜悪なもの、甚だしくは有害なものを覆って」いると述べ、あるイデオロギーを背景とした否定的見解に至っている¹⁶。

また佳心も1946年に『鬼恋』に関する書評を発表し、「非常に流行した一

冊」としながらも、「革命工作者がこのような意気地なしだとは矛盾も甚だしい！或いは作者はこのような革命工作者を諷刺しているのか？」と作品に対しては文学評とは異なる視点からの攻撃を加えている¹⁷。

『鬼恋』を好ましくない作品ととらえる向きは、1940年代後半になると更に大きくなる。『大公報』には例えば次のような記事も載った。

徐訏の作品は、価値の点から言えば、幾らかの紙幅を割いてまで批評するに値しない。彼はまるきり系統だっておらず、また責任感もないし、何の道理も弁えていないのだ。しかし現在、彼の作品の流行の程度、特に各学校における流行の程度を見ると、恐ろしいものがある。徐訏のあの顔中に化粧用クリームを塗りたくった偽装された唯美主義や世間ずれした口から出任せのペテンは、どちらも若者を知らないうちに毒素で汚染してしまうのだ¹⁸。

また、以下に挙げる文は、ある高校教師の投稿である。

授業外の読書ノートに、ある学生が徐訏の書いた鬼恋で読書記録をつけているのに気付いた。私はそれを読み、本当に悲しくなった。コメントを書いて、彼女にはそれらの有毒な物など読まない方が良くと勧めた他、彼女との会話からは、彼女が鬼恋だけでなく、徐訏の何冊もの小説を全て読んでいることがわかった。しかも彼女は、徐訏の小説は興味深いと表明した。私は彼女に読まないよう勧めたが、彼女はあまり同意できない様子で、徐訏の小説の物語は「人を惹き付けて夢中にさせる」ものがあり、筆致も活き活きとしているのだと語った¹⁹。

この教師は、「教師の立場から」「徐訏の小説には毒素が含まれており、青年の思想を害するものだ」と再三にわたって指導し、「徐訏のような輩はまともな人ではない」とすら述べている。そして、徐訏を好む女子学生が日頃から人生に対して後ろ向きで暗く、悲観的かつ消極的で疑い深いのは全て徐訏のせいだと決めつけている。

これらの評は、中国文学が置かれた当時の社会的状況を顕著に反映してい

る。文学は都市のもの、知識人のもの、という現実問題がありながらも、抗日戦争を背景として人民の闘争や文芸界の抗日統一戦線が求められる状況の下、1942年には毛沢東（Mao Zedong、1893-1976）による「延安文芸座談会における講話（通称「文芸講話」）」が行われた。この講話の中で毛沢東は、文芸は人民のもの、とりわけ労働者・農民・兵士に奉仕するものでなければならないと説いた。この主張は一個人の文芸論に留まることはなく、1949年の中華人民共和国成立後も文芸界の支配的な指導理念となっていくのであるが、徐訏が人気作家になった時代はまさにこの「文芸講話」路線が絶対化されていく過程であった。上掲の程帆の評に見える「有害」、佳心の評に見える「革命工作者がこのような意気地なしだとは矛盾も甚だしい」、『大公報』の「若者を知らないうちに毒素で汚染」や「毒素」、「青年の思想を害する」などと言った評価の視点が「文芸講話」路線の浸透を如実に物語っているだろう。『鬼恋』は決して労働者や農民・兵士に奉仕するものではないという断定である。徐訏が「寂しくひっそりと何十年も落ちぶれ」てしまった最大の原因は、徐訏自身にではなく、彼と彼の作品の置かれた文芸界の状況にあったのである。実際、中国大陸とは状況の異なっていた香港では、司馬長風が『鬼恋』について「奇跡のような成功」²⁰と評している。

尤も、厳しい批評或いは偏った評価を受けつつも、徐訏作品の人気は否定しようがなく、『鬼恋』は結果として計3回映画化されている。早くは『鬼恋』が監督何兆璋、周曼華・呂玉堃主演で1941年に上海の国華影業公司によって制作され、1956年には『鬼恋』が香港の麗都影業公司によって撮られた。監督は屠光啓、主演は李麗華、張揚、王元龍らである。映画界においても「文芸講話」路線が何の影響も及ぼさなかった訳ではないが、1941年は「文芸講話」の前年であることが幸いしたのであろうし、もう一本は撮影が行われたのが既にイギリス直轄植民地となっていた香港であったという点が大きいだろう。

更に1996年、香港で『鬼恋』を原作とした『人約黄昏』が上海電影制片廠・思遠影業公司の合同制作で撮られた。監督は陳逸飛、主演に香港の映画スター梁家輝（レオン・カーフェイ）を据え、張錦秋、盧迪らが脇を固めた。『人約

『黄昏』は第16回中国電影金鷄賞において、最高撮影賞と最高美術設計賞を受賞している。

4. 幽鬼を自称する女

『鬼恋』のヒロインには名前が与えられていない。最初から最後まで女は自らを幽鬼であると位置づけている。『鬼恋』の作品世界における彼女の存在について、幾つかの側面から考察してみよう。

4. 1. 内部に埋め込まれた「人鬼恋故事」

幽鬼と人間の恋という題材それ自体は、中国文学においては全く珍しいものではない。それどころか長い伝統がある。生身の男女の恋愛を描くことが禁忌であった文化的背景ゆえに、古代における中国文学は恋愛譚を人間の男と天人或いは仙人の女性、人間の男と妖怪の女という組合せのみに許して来たのである。中国四大民間伝説の「白蛇伝」や「牛郎織女」もこの流れの中にあるだろうし、六朝期の志怪小説集『搜神記』（成立年未詳）、宋代の説話集『夷堅志』（1198頃）、明末の「三言二拍」、清代の怪異小説集『聊齋志異』（1679頃）などには、幽鬼と人間の恋や甚だしくは結婚を描いた説話を多く収録している。こうした説話の型は「人鬼恋故事」と呼ばれている。そして、それらは幽界と人間界の存在同士の恋ということで、結末は悲劇的であることが多い。

異類婚姻譚にせよ人鬼恋故事にせよ、カップルの組み合わせとして男が常に人間であり、女は天界・仙界・異界の存在であることについて、古代中国では幽鬼や異類は畏怖や嫌悪の対象ではなく、寧ろ親愛の対象であり、それゆえに人鬼間の愛情が成立し得たと見る論もあるが²¹、男の側のみが人間であることの理由は示されていない。これには、歴史的にリテラシーが男の占有であったこと、文（文学）を操れる能力は男の独占であったことを指摘しておきたい。中国文学は長いこと、書き手も読み手も男であったのだ。即ち、中国文学における異類婚姻譚・人鬼恋故事の歴史は、リテラシーのある男性

が、女性という存在を自分達とは異なるものと見なしてきたことを意味している。ジェンダーの歴史を繙くまでもなく、男が文明を代表し、女が自然界を代表するという文化的言説をここにも見出せるだろう

人鬼恋故事の代表的な例として、日本でも恐怖譚『牡丹燈籠』に翻案された「牡丹燈記」を簡単に確認しておこう。明代の『剪燈新話』（1378 頃）収録の一篇として有名なこの説話は、青年喬生が幽鬼の美女符麗卿に魅入られ、法師の戒めを破ってしまったことで死んでしまうという物語である²²。愛し合う男女二人が死ぬことを一種のハッピーエンドととらえる向きもあるだろうが、喬生は麗卿が幽鬼であると知ると怯え、彼女との関係を断とうとするため、運命を共にしたいとは考えていなかったことがわかる。他方、麗卿は喬生に執着し続ける。喬生本人が望まぬまま死に至っていることで、「牡丹燈記」は幸福な結末とは言えないだろう。教養のある男が美女に誘惑され、その結果墮落・破滅し、或いは死に至るという、近代以降枚挙に暇がない物語の類型は、異類婚姻譚や人鬼恋故事と根を一にしているのかもしれない。

『鬼恋』がこうした人鬼恋故事をインターテキストにしていることは間違いない。徐訏自身は「子供の頃、三国演義の類の小説を読み、後には林訳小説を読んだ」²³と回想しており、同時代の多くの文人・作家が経たように少年期に人鬼恋故事を含む説話に触れる読書生活を送っている。作中、主人公「私」も「私は聊齋志異中の幽鬼に惑わされる多くの話を思い出した」²⁴と語っている。

更に女の容貌を「長いこと氷山の中心に埋められていた白玉のように冷たく艶やか」、声を「静まり返った深山幽谷で、岩山の氷柱が溶け、一滴一滴と静かな池へと滴る音のよう」とする描写や「あなたはこの世のものではなく、俗世の気配を感じさせないように思う。あなたが動く時には仙女のように軽やかで俗離れし、静かにしている時には仏のように厳かだ」という「私」のセリフからは、「私」が幽鬼の女を天界・仙界の存在のように見ている様が示される。「私」は女が幽鬼であるとは毛頭信じていないのだが、自らを人鬼恋故事の登場人物に見做していることは明らかである。

作品の後半、ヒロインである幽鬼は実際には人間であることが明かされる。

しかし、人鬼恋故事の歴史的文脈に鑑みれば、女が幽鬼を自称する冒頭に語り手「私」と女の恋の結末は暗示されていると言えよう。

4. 2. モダン都市上海のミステリアスな夜

伝統的な「人鬼恋故事」の形式を踏襲してはいるが、舞台が上海であることで物語はエキゾチックな雰囲気の色濃く帯びている。作品冒頭、「私」が友人とお喋りを楽しむのは上海最大の繁華街である南京路のカフェである。上海はアヘン戦争（1840-1842）の後、イギリス・フランス・アメリカが租界としたことで、西欧の近代工業・商業が入り込み、他に類を見ない一大国際都市となっていた。花崗岩による舗装の大通り、イギリス式競馬場、林立する大型デパート、西欧式のカフェやレストラン、新古典主義建築群、ガス燈等、それらは無論西欧列強による侵出の産物ではあったが、同時に又、「中国の中の外国」とまで称されるほどに異国的な情緒を醸していたのである²⁵。

「私」と幽鬼が好む西洋の高級タバコ Era、二人が会話を楽しむカフェ、幽鬼の家の居間のピアノとヴァイオリン、供されるブランドーやコーヒー、オメガの時計…。『鬼恋』が発表された1930年代上海の読者の全てが、こうした雰囲気を共有していたとは言えないにしても、上海はこうした西欧的な小物や雰囲気を想像することが容易な都市空間ではあった。そして、この雰囲気が「私」の幽鬼への恋が悲しく破られるさまを盛り上げているのである。

在米の学者李欧梵は、1930年代上海において西欧から流入した物質文化の影響の大きさは、延いては中国人の生活様式や価値観をも強く揺り動かす結果になったことを辿った上で、同時に又、当時上海で活躍した作家達が文学作品を通して、西欧の物質文化受容の過程における失望感・挫折感・喪失感をも描いていると指摘している²⁶。それらの失望感・挫折感・喪失感が商業主義・物質文化と直接結び付いたことで、1930年代上海は多くの文学作品の中で華やかながらも厭世かつ頹廢的な都市として描かれることになった。高校教師に「小説には毒素が含まれており、青年の思想を害するもの」とされた徐訏の『鬼恋』もその一端を担ったことになるだろう。

また、「私」と幽鬼が逢うのが決まって夜であるという点は、物質文化の極

致とでも言うべき国際都市上海を舞台としたこの物語に幻想性・神秘性を添えている。そもそも初めて二人が出逢い、「私」が「美しいものは恐ろしい。そう、美しいものは恐ろしいのだ。私は帰途につく道すがら、あの恐ろしいほどの美しさ、怖いほどに美しい彼女の容貌についてずっと考えていた」と魅入られてしまうのは、それが「月の光が凄絶なまでに清らかな」深夜だったからでもあるだろう。

月光の下、彼女の銀白色の歯はあたかも宝剣のように鋭い光を放ち、真っ白な顔は雪のようで少しの血色もない。ぞっとするほどなまめかしい月の光が彼女をそのように見せているのか。それとも真っ黒な装いが彼女をそのように見せているのだろうか。私には知る由もなかった。

雪のような肌の黒衣の美女が幽鬼を名乗るのに、深夜の月光の下という舞台装置は最上の効果を上げていると言える。そして別れ際、もう一度逢いたいと言う「私」に幽鬼は「それなら来月のこんな月夜に」と言い、「私」がそんな悠長に待ちたくないと思えると「来週の最初の月夜に」と答えている。幽鬼は夜の世界の生き物だからという理由で、女は夜以外に逢うことを許さない。結果、二人はその後、夜に逢い続けるのである。

4. 3. 「人」に戻る瞬間——「幽鬼の恋」

夜にのみ逢っていた二人が日中顔を合わすのは、「私」の二ヶ月の旅行の後であった。

その時、時刻はまだ早く、私は又寺に戻ってぶらぶらした。不意に外に出た時、一人の尼僧が5メートルほど離れたところから歩いて来るのが目に入った。私は彼女の行動に見憶えがあるような気がして、注意を引かれた。果たして彼女は私に近付いてきたのであるが、私はびっくり仰天した。なんと彼女は「幽鬼」だったのだ！

昼間に活動しているということを理由に、「私」は今日こそ人間であることを認めるようにと迫る。そこで幽鬼は泣き出す。「どうしても私を思いやってくれないのですか？ どうしても私が人間であると言いたがって、墓に葬られた私をこの世に引きずり出そうとする。そして、どうしても魑魅魍魎が跳梁跋扈するこの世で私を凡人にしようというのですね？」普段は冷たいまでに冷静な幽鬼が泣くのも、感傷的かつ憤激した口調で話すのも、それまでは全くなかったことである。

この瞬間に幽鬼の女は「人」に戻ったのである。昼間は、暗い闇夜、真っ白な月の光という、彼女に神秘性を付与していた要素がない。前項で述べたように、彼女は夜にのみ「幽鬼」たり得ていた。神秘性という一種の神通力が失われて、女は涙を流し、怒りを表す普通の人間に引き戻されてしまうのだ。

そして冷静さを取り戻すと、「私」に問われるままに革命家として過ごした自身の経歴を披歴し、夫であった男性が殺され、自身も人を殺したことがあると語る。その壮絶な半生の中で味わい尽くした生きることの困難や痛苦を吐露し、「私は幽鬼でいたい、幽鬼になりたいのです」、「だから私はここで幽鬼を演じつつ生きています」と述べる。彼女のこの、人とは恋愛ができない存在である「幽鬼」でありたいという願望は、所謂人間らしい生活の否定、延いては女性性の否定である。

ところが、女の苛酷な半生を知っても尚彼女を愛する「私」が、勇気を振り絞って彼女にキスをし、「さあ言って、僕を愛していると」と言うと、女は「仮にそうだとしても、そうでないことを望みます」と返す。この言葉は女も「私」を愛していると言ったに等しい。夜に幽鬼となる女は日中に「私」と遇ったことで「人」に戻ったのである。そしてその瞬間、恐らくは今まで押し殺していたであろう感情を迸らせたのである。

「私」が女と直接顔を合わすのは、実はこれが最後であった。女はその日のうちに姿を消してしまうのである。手紙に「これまでのことは人生ではなく、一場の夢だったのです。夢は実現できないものですし、実現する必要もありません。(中略) 今後私はこれまで通り幽鬼として過ごします。あなたはしっ

かり人として過ごすように」と書き残して。その後、「私」がショックのあまり病気で倒れ入院すると、女が男装して花やお菓子を届け、「私」の回復を見届けている様子がほのめかされるが、姿を現すことはない。更に「私」が回復すると、「あなたは今やっとな回復したようですね。それなら私があなたから去って行くことを許して下さい」という手紙を送り、完全に作品世界から消えてしまう。

女は結局、人として「私」と恋愛をし、生きるのではなく、幽鬼として生きることを選択したのである。既述のように女も「私」を愛していたことは明らかであり、「私」の入院中の細やかな気遣いにもそれは見て取れる。そしてそれは間違いなく、彼女の中での「幽鬼」と「人」との激しい葛藤をも意味している。

ここに至って読者は、本作のタイトルが「鬼恋（幽鬼の恋）」であるのは、「私」の幽鬼の女への恋を指しているのでは決してなく、まさしく幽鬼を自称していた女自身の恋を指していたのだと知る。女は「私」に惹かれ、幽鬼から人へ戻り、「私」と恋愛するという選択肢を可能性として十分に考えつつも、最終的には「私」から離れて行った。言わば、幽鬼としての彼女が人としての彼女を凌駕したのである。

5. 結び——反転する人鬼恋故事世界

中国の伝統的人鬼恋故事において、人間であるのは必ず男の側であり、ほとんど悲劇的結末であることは4. 1で見た。『鬼恋』もこの型を受け継いでいるが、本作で明らかになったのは「あなたを愛している」と言い続け、恋愛に執着したのが男の側であり、女は恋愛を棄てたということである。

ここで先に述べた、女の中での「幽鬼」と「人」との葛藤について再考してみると、「幽鬼」は冷静冷酷なまでに理性的な存在、愛情というごく自然な感情をも抑圧する非人間的な存在である。そして、人こそが自分の感情のみに従い、愛情を追い求める本能的・原初的な存在として描かれている。文明を代表する男性と自然界・異界を代表する女性の伝統的な構図は、『鬼恋』に

において完全に反転し、それによって照射されたのは「私」への愛情を認めながらも非人間的な存在であることを選り取った女の悲しいまでに固い意志であった。この作品が悲恋物語たり得ているのは、まさにその点にある。『鬼恋』は女に愛を受け入れてもらえなかった「私」の側の物語ではなく、「私」を愛する心を持ちながら必死で押し殺し、「私」から離れて行く女の悲しい物語なのである。

幽鬼の女の矛盾を抱えた心理状況こそが『鬼恋』の魅力の所在だとする論がある²⁷。確かに女が人間界を見棄てた幽鬼を自称しながらも最終的に「私」の求愛を受け入れていたら、『鬼恋』はそれこそ「奇跡のような成功」を収めることはなかっただろう。徐訏は中国文学に多くの類を見ることのできる人鬼恋故事を1930年代の夜の上海を舞台に、悲恋の主軸は動かさずに、女の側の悲しく頑な選択を描き出した。

徐訏は『鬼恋』の成功後、本格的な職業作家の道を歩み出す。2. 2で確認したように、徐訏の小説は多くが悲劇的恋愛をドラマチックに描いたものである。都会が舞台、西欧的な異国情緒、美女の登場と恋愛の葛藤、悲劇的結末という、徐訏作品のこの四つの基本軸は『鬼恋』をもって端緒が開かれたと言える。徐訏作品に描かれる悲恋は時代性・出版業界の趨勢・読書層との関わりにおいて、それ自体が研究対象となるべき一大テーマである。本稿をその導入、序奏としたい。

¹ 呉義勤著「前言」『漂泊的都市之魂——徐訏論』蘇州大学出版社1993年。

² 李偉著『神秘的無名氏』上海書店出版社1978年。

³ 前野直彬編『中国文学史』東京大学出版会1975年には、「〈小説〉という語は、もともとは、量も小さく、質からいっても賤しく軽い話、を意味していた」とある。

⁴ 日本における徐訏関連の専論は以下の通り。新開高明「徐訏について」(『防衛大学校紀要』第廿六輯、昭和48年3月)、勵儲「徐訏研究ノート——研究の現状、作風及びその生涯」(『日本アジア言語文化研究』第7号、大阪教育大学日本・アジア言語文化学会2000年3月)、夏嵐・森賀一恵・磯部祐子「徐訏の話劇について」(『富山大学人文学部紀要』第56号2012年2月)。新開論文は総体的な徐訏論となっているが、徐訏の存命中のものであり、幾つかの長編作品が未刊行であった。勵論文は『悲慘的世紀』を中心に、ジョージ・

オーウェルの影響と徐訏の政治意識を論じている。夏論文は徐訏の戯曲を紹介しており、一幕劇『租押頂壳〔部屋の又貸し〕』の翻訳を付している。

⁵ 徐訏「胡適之先生」『徐訏文集』第11巻・散文、上海三聯書店2008年。

⁶ 徐訏「汪敬熙先生」、注5前掲書。

⁷ 発表媒体は不明。

⁸ 魯迅は1934年8月13日の曹聚仁宛の書信において、「陶・徐に至っては、あれは林門の顔回・曾参であり、夫子に及ばざること甚だ遠し甚だ遠し」と記している。『魯迅全集』第12巻、人民文学出版社1996年。「陶」とは陶亢徳を指し、当時徐訏と陶亢徳はともに『人間世』の編集をしていた。元々、魯迅と林語堂は友人であったが、政治的にも文学的にも考え方の違う二人は次第に疎遠になっていき、この書信の頃に完全に決裂している。顔回と曾参とは孔子の弟子であり、ここでは林語堂を「夫子(=孔子)」と見なし、林語堂・陶亢徳・徐訏を揃って揶揄の対象としている。

⁹ 徐訏と妻趙璉の結婚生活については、作家蘇青(Su Qing、1914-1982)の自伝的小説『結婚十年』(天地社1944年)に反映されている。1940年代初頭、蘇青・李欽後夫妻と徐訏・趙璉夫妻は上海で近所に住んでおり、親しく行き来していた。その過程で李欽後と趙璉が不倫関係になる。『結婚十年』において蘇青自身は「私(蘇懷青)」、李欽後は「徐崇賢」、徐訏は「余白」、趙璉は「胡麗英」とされている。但し、『結婚十年』は事実に基づく部分もあるにせよ、あくまでフィクションである。

¹⁰ 徐訏の経歴については以下を参照した。吳義勤・王素霞著『我心彷徨——徐訏伝』上海三聯書店2008年、葛原著『残月孤星——我和我的父親徐訏』上海文化出版社2003年、注4新開高明前掲論文。

¹¹ 司馬長風著『中国新文学史』下巻、昭明出版社1978年。

¹² 嚴家炎著『中国現代小説流派史』人民文学出版社1988年には次のようにある。「私は『中国現代小説流派鳥瞰』という講演において、次のように述べた。40年代国統区にはごく小さな浪漫主義の流派が存在した。その代表的な作家が『鬼恋』、『阿剌伯海的女神』、『風蕭蕭』の作者徐訏と『北極風情画』、『塔裡的女人』、『野獸・野獸・野獸』の作者の無名氏だ。嚴は本書中、中国現代文学の「浪漫主義」について、その特徴を感傷的・メランコリック・濃厚なムードだとしている。

¹³ タイトル「鬼恋」の「鬼」とは、日本語の「オニ」とは異なり、幽鬼・幽霊を意味する。以後、本稿では「幽鬼」とする。

¹⁴ 『宇宙風』については以下を参照した。周葱秀・涂明著『中国近現代文化期刊史』山西教育出版社1999年、陳荒煤主編『中国現代文学期刊目録匯編』上巻、天津人民出版社1988年。

¹⁵ 蘇雪林がどこでどのように述べているかは不詳。注11司馬前掲書に拠る。

尚、司馬長風は『鬼恋』を徐訐の出世作と見なしている。

¹⁶ 程帆「鬼恋与人恋——關於徐訐著『鬼恋』的題材与主題」『微波』第1巻、1944年8月。

¹⁷ 佳心「關於鬼恋」『文芸時代』第1巻第3期。刊行年月の記載はない。しかし、創刊が1946年6月であるため、第1巻第3期の刊行は1946年7月であると考えられる。注14周・徐前掲書に拠る。

¹⁸ 老白「雪花膏下面的汚穢——再評徐訐的作品」『大公報』1948年2月3日、4版。

¹⁹ 鍾廷明「学習態度及其他」『大公報』1948年12月7日、7版。

²⁰ 注11 司馬前掲書。

²¹ 中鉢雅量「異類婚説話の變容——中国戀愛文學史素描の試み」『日本中国学会報』第29号1977年。

²² 瞿佑著、飯塚朗訳『剪燈新話』平凡社東洋文庫1965年を参照した。

²³ 徐訐「書籍与我」『徐訐文集』第9巻・散文、上海三聯書店2008年。

²⁴ 徐訐著『鬼戀』夜窗書屋1947年。本稿における引用は全て本テキストに基づき、拙訳を付す。

²⁵ 上海および南京路に関しては劉建輝著『魔都上海』講談社2000年、丸山昇著『上海物語——国際都市上海と日中文化人』講談社学術文庫2004年を参照した。

²⁶ 李欧梵著、毛尖訳『上海摩登——一種新都市文化在中国1930-1945』北京大学出版社2001年。原著はLeo Ou-fan Lee, *Shanghai Modern: The Flowering of a New Urban Culture in China, 1930-1945*, Harvard University Press (1999)。

²⁷ 馮奇「人生尋夢——論徐訐三四十年代的小説創作」『中国現代文学研究叢刊』1994年第2期。

【附記】本稿は学術研究助成基金助成金の交付を受けた挑戦的萌芽研究「中国現代文学における通俗小説——Xu Xu・Wumingshiを中心に」（課題番号：15K12869）による研究成果の一部である。